

2018 年アジア政経学会・事業報告

第 25 期の執行部体制のもと、従来通り、学会大会や定例研究会の運営を行い、ニューズレター・学会誌の刊行などを行った。

具体的な活動内容は以下の通り。

<学会大会>

2018 年度に実施した学会大会は、例年通り春季と秋季の 2 度。

春季大会は 2018 年 6 月 9 日(土)と 10 日の 2 日間、学習院大学(東京都・豊島区)で実施された。8 つの自由論題セッション(学会員の個人報告をグループングしたもの)、3 つの自由応募分科会(学会員からの提案を受けて設置された分科会)、1 つの共通論題セッションが設けられ、それ以外にも、開催校主催の国際シンポジウムと榎山奨学財団の支援による国際シンポジウム(榎山セミナー)がそれぞれ実施された。

今年度の共通論題は「アジア研究の成果をどう教育につなげるか」。従来は研究に特化した形で共通論題のテーマ設定がなされてきたが、今年度は、日本学術会議における参照基準をめぐる議論を受け、アジア研究の成果をどのような形で教育へと還元し、研究のすそ野を広げるか、より具体的にはどのような教科書づくりが必要とされ、そのためにどのような努力が重ねられてきたのかについて、議論がなされた。

榎山セミナーでは「アジアの中国研究:アジアから中国への視線」をテーマに、韓国、台湾、インド、シンガポールの中国研究者を招へいし、それぞれの地域における中国研究の現況を紹介してもらいつつ、どのような研究テーマが取り上げられ、それぞれの地域から見た中国がどのような姿を示しているのかについて、意見を交わした。これ以外にも、台湾東南アジア学会とのラウンドテーブル「台湾の新南向政策を評価する」(英語セッション)が実施され、台湾側の報告を受けた形で、本学会の会員からさまざまなコメント・質問が出され、台湾の外交政策をめぐって意見交換が行われた。

秋季大会は 2018 年 11 月 24 日(土)に新潟大学(新潟県・新潟市)で実施された。7 つの自由論題セッション、5 つの自由応募分科会、1 つの共通論題セッションが設けられ、春季同様、多くの報告・議論がなされた。

これらの情報は、学会の公式 HP を通じてアクセスできるようになっている。

<http://www.jaas.or.jp/index.html>

<定例研究会>

今年度は例年より少ない 1 回の開催で、2 名の研究者が報告を行った。具体的には、2018 年 12 月 22 日(土)の午後 1 時から 2 時 50 分にかけて、東京大学本郷キャンパス・東洋文化研究所で、第 21 回定例研究会が開催され 2 名の若手研究者による報告が行われた。

<ニューズレター・学会誌>

ニューズレターは第 50 号と第 51 号を刊行。大会参加録や入退休会者情報などを提供し、学会員の利益に供した。

学会誌は、第 64 期第 1 号から第 4 号まで 4 冊を刊行。特集を組むなど工夫することで、刊行ペースを維持することができた。収録論文などは、J-Stage を通じて自由にアクセスすることができるようになっている。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/asianstudies/list/-char/ja>

<顕彰事業>

本学会の学会誌に掲載された若手研究者の論文を中心に、毎年、優秀論文集を選考する顕彰事業を行ってきたが、今年度(第 15 回優秀論文賞)は岡部正義会員による「フィリピン・ミンダナオ農村部における教育需要の持続性に関する社会経済分析——ジェンダーと教育水準の世代間関係に着目して」が授賞対象作品となった。

<名誉会員の推挙>

本会会員規則第 5 条 に基づき、石井明会員と天児慧会員を名誉会員に推挙し、両会員からも、これを受諾する旨、報告があった。

<国際共同利用・共同研究拠点申請へのサポートレター作成>

文科省の国際共同利用・共同研究拠点申請のために、3 研究機関へサポートレターを作成し、アジア研究の拠点づくりへの支援を行ったが、残念ながら 3 研究機関とも採択されるには至らなかった。

<日本学術振興会賞への会員の推挙>

日本学術振興会から日本学術振興会賞の受賞候補者推薦の依頼が来たため、理事会で審議を行い、その結果、本学会の会員一名を候補者として推薦することとなった。

<名簿の作成と会員投票の実施>

2018 年 10 月現在での学会員名簿を作成した。この作業を踏まえて会員投票を実施、2019 年 3 月 11 日に開票作業を行った。その結果、評議員会に推挙する理事候補 23 名、監事候補 2 名をそれぞれ選定した。

以上